

福 寿 院

須賀崎山 勝福寺 福寿院、通名赤門寺ともいった。西門が朱塗りの門であったからである。

開基は聖武天皇神龜年間(七二四—七二八)で行基菩薩の創建によるもので、地藏寺の客寺としてあった。

後嵯峨天皇の時代、弘仁年中(八一〇—八二二)に弘法大師が真澄田神社に参籠の折、七堂伽藍に僧舎六坊を設けるなど、近隣に多くの信徒を持ったが、弘長二年(一二六二)の暴風のため、多宝塔を残してそのすべてが倒壊した。ために一時は衰退を極めたが、文永十年(一二七三)中興の開山といわれる空円上人は痛くその衰微をなげき、百万手をつくして堂宇、僧舎の再建をはかり、これを復興するにいたった。以来空円上人の徳望は広く諸人の帰依を集め、尚真澄田神社の別当職を司った。

嘉吉年間(一四四一—一四四四)に於ける当寺の境内は、東西二町、南北三町余あり、境内は古く南大門があつて実に巖然たるものであつたが、天正年間(一五七三—一五九二)に信長の命を受けた秀吉が、岐阜攻めにあたり当寺に本陣を構えたが、多宝塔を除く外一切の建物が焼き払われたという。慶長八年(一六〇三)当時の十一代住僧、実慶

よつて漸く堂宇は建立されたものの僅かにその形態を保つのみだつた。

境内の南端を西より入り、本堂の正面にいたつて南門を入れれば左に多宝塔があり、正面に僅かの堂宇が並んでいた。維新の際に南門を廢して、西門を設けた。これが朱塗りのいわゆる赤門である。

大正十一年三月市の東方に、花柳界花岡町がなるにあたつて、境内を東西に道路が貫通したので寺の形態が一変してしまつた。

多宝塔は弘仁年中(八一〇—八二二)当時の再建の折建立されたもので、高さ二丈七尺、九尺四面の、屋根桧皮葺二重の塔であつた。實に一千年の昔を偲ぶ古色蒼然たるもので、境内には延命地藏菩薩を本尊として安置されてあつた。塔の周囲には石の玉垣が設けられてあつた。

明治四十三年八月二十九日付で、特別保護建造物に指定されたが、昭和八年一月三十日、折から境内に於いて角力の興行があり、櫓上より煙草の失火により半焼の厄にあつた。同年四月には国宝の指定が解かれた。難をのがれた本尊地藏菩薩は本堂に移された。

多宝塔は平安時代の初期、高野山に開かれた真言宗の伽藍にはじめて出現した二種類の新様式の塔で、一つは、ゆぎ塔、一つは大塔

といった。両者とも円筒形の塔身上に方形の屋根を架し、頂上に相輪を立てた。大塔はその塔身の四方に廂屋(もこしともいう)を付し、方五間、高さ百数十尺を超えた大建築であったが、これを簡素化したものが多宝塔で、したがって本来は真言宗伽藍の塔である。

この塔が在来一般の塔と異なるところは、その形状のほか、在来一般塔婆が釈迦の墓、ひいては仏法の祖師なる意義を有するものに対して、真言宗の本尊大日如来の三昧耶形(さんまいやぎよう)として造建されたものであった。

多宝塔の遺構は高野山金剛三昧院、尾張市浄土寺、京都府金胎寺、大福光寺などに鎌倉時代の優れたものが多数現存し、特に石山寺多宝塔は、源頼朝の再建と伝えられ、形態完好優美で、全国多宝塔遺構の白眉とされている。

尚この地方に現存するものに左記がある。稲沢に性海寺、万徳寺、春日井に密蔵院、荒子観音など。

昭和五年住職惠寛の時代に境内の一角を利用して幼児を預かる幼稚園を設け、福寿仏子園とした。恐らく寺院に於ける幼稚園の経営は一宮では初めてのことであった。

戦後は本堂並に幼稚園も復活し、往時の福寿院は再興した。

歴代の住職は次の通りである。

空円—空観—圓誓—任宗—眞祐—頼善—実清—秀覚—暁学—實暁—
實慶—聖秀—長賢—秀暁—暁悟—祐暁—暁稚—良暁—陽春—亮遍—
亮意—慈瞬—大運—宏演—密乘—大溪—恵賢—恵定—大燈—恵純—
恵寛—智海—憲明

尚 空円の碑は福寿院の西南、八剣社にある。空円入定の地とさ
れているが、もと福寿院の境内だったともある。尚 空円は

恵果—空海—聖宝—義範—聖賢—覚濟—常円—空円とある。

尾張西国三十三箇所第二十六番の札所として知られ、その御詠歌
に

さわりなく 迷いの雲のそらはれて 大慈大悲の誓ひたのもし
本尊は十一面観世音である。

福寿院と地藏寺の住職は真澄田神社の別当職を兼ねていた。中世
以来、神仏習合のならわしで社寺の交流は密接であった。

明治初年、新政府の神道国教化政策に基いて、神道擁護、神仏混
合の廃止を目的として神仏分離政策が出された。これは復古神道の
影響化で天皇の神格化を目的としたもので、慶応四年（一八六八）の

神仏判然令によって具体化したものであった。

明治元年三月十三日、太政官布告は神社と神主以下の神職の神祇官直屬を命じ、社僧、別当の職を解いた。そして従来の権現、菩薩、薬師などの社名は改称され、仏教色を排除するため神社にあった仏像、仏具などが廃毀された。廃仏毀釈(はいぶつきしゃく)という。

令和4(2022)年11月8日福寿院住職より福寿院の由来(檀家さんへの説明資料)の本資料を頂き、地づ協のHPへの掲載の許可をいただきました。地づ協会長 木村